

## 33 日本医師協会と小川劍三郎

寺 畑 喜 朔

金沢医科大学

## 一、日本医師協会の設立とその推移

大正三年四月四日東京帝国大学医科大学法医学教室において「医師の社会的、経済的改善と救済」を目的に、奨進医会の富士川游らが主導して、日本医師協会創立発起人会が開催された。以降同年十二月十五日の委員会で協会規則の原案が作成され、翌年一月一日をもって創立発会した。初代会頭に片山国嘉、理事には富士川游、呉秀三、尼子四郎、岡崎桂一郎、藤根常吉らの奨進医会の主要会員が就任し、共済、弔慰、紹介、調査、庶務、会計に分掌し運営に当たった。明治四十二年岡崎が主宰して刊行された「刀圭新報」（奨進医会の機関誌）は協会の報道機関誌を兼ねた。

設立以来、協会は東京はじめ全国に啓蒙し、支部を設立して全国的組織に発展させた（昭和三年当時には

会員数は三五〇〇名を超える）。協会は昭和二年二月会頭に代わり理事長制として富士川がその任に就いた。これに先立って大正十一年七月十二日の委員会において、協会機関誌を「医談」と改題し、第一巻、第一号を同年十月十七日に発行し、協会事務所は本郷五丁目三五番地の山崎佐方に委嘱した。

昭和五年富士川に代わって小川劍三郎が理事長に就任し、「医談」の継続機関誌として七巻一号は「日本医師協会雑誌」と改称、改版して発刊された。小川は翌年の四月頃より不眠、病魔に襲われ、協会は翌七年三月より学習院長荒木寅三郎を会頭に推戴した。荒木は昭和十七年一月の死去まで会頭の任にあり、ついで古瀬安俊が会頭を務めた。日本医師協会雑誌は戦時下の用紙配給停止のため第二十巻、五、六、七合併号をもって休刊（昭和十八年九月十七日発行）となった。この合冊号の所蔵機関は、調査の結果北大、弘前大、新大、群大、労研の五機関である。

## 二、東京医師建築信用購買利用組合の設立

協会設立時には評議員として、呉とともに調査部委

員を務めた小川剣三郎は次第に協会運営に深く関わり、小川は委員会において関東大震災直後の医家の復興再起を促進するため「東京医師建築信用購買利用組合」の設立を主張提案し、賛意を得た上自らその責任者となり、その運営の任についた(大正十二年十二月設立)。

この企画の陰の絶大な協力者は、のち東京府衛生課長の軽部修伯であり、二人は寢食を犠牲にして明治三十三年制定の産業組合法に準拠して、組合員一二五名、出資口数一、八〇四口、出資金九〇、〇二〇円で定款議定を行い、組合は発足した(翌十三年一月十三日)。実に短期に組織化に成功したのである。時代的背景があったにしろ、まさに驚異である。組合事務所は府庁衛生課の一室を借り受けて事業は開始された(組合長理事小川剣三郎、専務理事軽部修伯、常務理事宮田哲雄)。小川設立の組合より遅れて設立の「帝都医師信用購買組合」が同様事業を展開していたが、両組合は協議の結果、一層の事業効率化、発展のため、昭和二年一月小川の組合に発展解消して合併された。合併後、事務所業務の効率推進のため、独立建築が企画され、

神田連雀町の阿久津病院跡(二百余坪)を阿久津三郎医学博士に好意的提供され、工期(昭和三年八月〜同四年十月)、鉄筋コンクリート五階建、総延坪七六四坪、工費二一余万円、エレベーター付設の多目的近代的建築が完成した。これを「東京医師会館」と名付け、十一月三日に盛大な落成祝賀会を挙行した。小川の真骨頂と面目躍如たる姿を彷彿とさせる。

この東京医師会館は組合業務のほか、医家先哲追薦会、日本医史学会例会などの会合に度々活用されたことは当然であるが、戦時下、戦後どのように推移したのか、現在全く判然としない。今後の調査に期待したい。

また、日本医師協会の戦後の推移については、岡田靖雄氏の調査によれば「：昭和二十年後本会復会後は小畑惟清氏(日本医師会長、東京医師会長)であったが、昭和三十七年七月二十三日小畑氏死去の後には会長空席のまま」とある。この点についても、今後の調査が待たれる。